

# 東アジアレビュー

● THE EAST ASIAN REVIEW

月刊 東アジアレビュー 2011年12月号 / No.180 発行:東アジア総合研究所

【視点】	TPPに参加しなければならない理由	西和久……………	1
【報告】	動き出す米朝、南北、日朝関係の行方 第12回 北朝鮮問題セミナー 報告	編集部・前田幹弘……………	3
【報告】	躍動する朝鮮半島、その展望と課題 朝鮮問題研究センター設立記念シンポジウム	編集部……………	5
【コラム】	虎穴に入らずんば、虎児を得ず —日本人研究者の中国観を論ずる	李鋼哲……………	8
【見聞記】	秋のソウル	小野田美紗子……………	9
【編集後記】	民主主義は政治体制の最終形態?	前……………	12
	身近になるグローバル化	作……………	12



## TPPに参加しなければならない理由

西和久・Nishi Kazuhisa  
東アジア総合研究所副所長、帝京平成大学教授

### ❖米国主導の中国包囲網

いまでも国内で行われている、TPP（環太平洋パートナーシップ協定）が是か非かの議論は、どこか違うのではないかと感じていた。“平成の開国”とのスローガンを掲げながら、経済的に必ずしもメリットのはっきりしない米国主導の貿易圏に、日本がなぜ追い立てられるように参加しなければならないのか、議論はそこをすり抜けている、と。

11月に米ホノルルで開かれたアジア太平洋経済協力会議（APEC）と、それに続くインドネシ

ア・バリ島での東アジアサミット（EAS）が、TPPの性格を誰の目にも明らかにしてくれた。

とくに東アジアサミットでの主役は、初めて参加した米国だった。オバマ大統領は、APECで日本のTPPへの交渉参加を取り付けたあと、オーストラリアで、米国のアジア回帰を宣言。海兵隊の駐留でオーストラリア政府と合意した。

そのうえで乗り込んだサミットで、オバマ大統領は中国の温家宝首相に南シナ海の「航行の自由」を要求。これに参加18カ国中、カンボジアとミャンマーを除く16カ国が同調したと報じら

れている。目立ったのは、米国の、リーダーとしてのあざやかなアジア復帰と、妥協のない中国牽制だった。

TPPは、経済と安全保障を一体化して「アジアで中国と影響力を競い合うための試金石」(サイモン・タイ・シンガポール国際問題研究所理事長、『フォーリン・アフェアーズ』のインタビューで)に他ならなかったのである。

これをもって、アジアにおける米中覇権時代の始まりという人もいるが、東アジアサミットを見る限りは、中国側に言わせなくても、米国を中心とした「中国包囲網」だったのは間違いない。そして、米国にその役割を求めたのは、ASEANであり、日本だったのだ。

### ❖人民解放軍の発言力

もっとも、包囲されるような事態を招いたのは、中国自身であるともいえる。尖閣諸島、南シナ海の領有権問題など強硬路線をとってきた、中国の「外交的失策」(前出のタイ氏)が、周囲の国々に深刻な警戒感を抱かせたことは、この間の日中関係の推移を見ればよくわかる。

中国に対する牽制という点では、珍しく日本の外交がポイントを稼いだといえるかもしれない。さっそく中国の対日姿勢が微妙に変化したとみられるからだ。

東アジアサミットの直後に、玄葉光一郎外相が訪中、中国側から厚遇を受けたと報じられた。さらに野田佳彦首相が12月に中国を訪問する予定で、その際には中国側が日本産食品の輸入規制緩和をお土産に用意しているとも伝えられる。

ただ、気になることがある。しばらく前から、中国の外交が必ずしも一枚岩ではなくなっていることだ。

米国では毎年、USCC (U.S.-China Economic and Security Review Commission、米中経済・安全保障調査委員会)が年次報告書を議会に提出する。経済分野と軍事活動における中国の動きについての調査報告だ。今年はまさに、11月のAPECと東アジアサミットの間、の時期に公表された。

報告書が行っている、近年の中国の外交政策決定過程についての分析を、宮家邦彦・立命館大学

客員教授が紹介している(「JBプレス」)。「過去10年間、外交部は他省庁への依存を深める中でその役割を減少しつつあり、中国にとって死活的でない諸国に対してのみ政策決定上の影響力を有している」「最近、人民解放軍関係者は核戦力、領土問題、インド、日本、北朝鮮、パキスタン、ロシア、米国に関連する外交、軍事問題に関する公の議論において発言力を拡大している」——といった分析だ。

人民解放軍が中国の外交に大きな影響を与えているのは、領土問題がからむ尖閣諸島での日中の軋轢や、南沙諸島でのベトナム漁船銃撃事件など中国の強硬な外交姿勢で、誰もが気づいている。

軍の発言力が外交を左右する現状に、戦前の日本で軍部の独走を政府が止められなかったことを思い出すのは、宮家教授だけではないはずだ。今後も日本の対中外交の手腕が試され続けることになるだろう。

### ❖日本は何を守るか

一方で、対中外交で得点をあげたからといって、TPP参加という代償が大きすぎることがあってはならない。TPPへの参加交渉にもまた、日本外交の手腕が問われることになる。

最初に経済的メリットがはっきりしないと書いたが、カナダやメキシコが参加することになって、貿易圏全体の経済規模が大きくなれば、メリットもふくらむ可能性はある。同時に、いま最前列で声高に反対を叫んでいる既得権益グループに対するショック療法の効果もあるかもしれない。

TPP参加をきっかけに経済の活力を取り戻したいというのが、賛成派の多くが考えていることのように。しかし、大部分の人が、築き上げてきた生活水準を切り下げてまで、あるいはずっと享受してきた安全基準を引き下げてまで、経済を活性化しても意味がない。

「守るべきものは守る」という公約にならない公約をした野田首相に、勘違いしてほしくないのは、何を守るのかは外交の結果で決まるものではないということだ。この国の将来の姿を描いたうえで、政治が決めるべきことなのである。

## 報告



北朝鮮問題セミナー／第12回 (2011年11月29日 東京・学士会館)

## 動き出す米朝、南北、日朝関係の行方

姜 英之・Kang Young ji  
東アジア総合研究所 理事長

モデレーター：小野田明広 (当研究所副理事長)

第12回北朝鮮セミナーが、11月29日火曜日、午後6時半から東京神田の学士会館で行なわれた。冒頭に過去11回の簡単な経緯報告があった後、姜英之理事長が約70分間スピーチ、続いて質疑応答が行なわれた。

姜理事長は冒頭、昨年3月に韓国哨戒艦沈没事件が発生した後の5月からシリーズでセミナーを開始したと説明。現在まで北朝鮮の動向について異なった立場からさまざまな分析が行なわれきたが、当研究所の北朝鮮をめぐる研究、特にこの北朝鮮問題セミナーは見方のぶれがなく進んできたと自負していると述べた。北朝鮮国内のみならず、対外的な側面からの分析も加え、総括する意味合いを込めて報告するとした。

## 5つの当面の結論

冒頭に、李容鎬総参謀長、金正角軍政治局第1副局長、金英哲軍総偵察局長の“新軍部”3人を板書しながら北朝鮮の体制基盤を説明。

北朝鮮の政権崩壊が懸念されるような状況もありながら、昨年9月の労働党代表者会や同年11月の韓国島への砲撃事件から1年が経った。金正恩後継体制について現時点では韓国、米国、ロシア、中国の4カ国の論調はどうかと分析に入った。

まず韓国の論調については、世宗研究所の上級研究員・鄭成長チョンソングン氏が10月28日に南北朝鮮統一フォーラムに寄せた見方が紹介された。金正日総書記が死亡しても混乱は起きない、混乱があっても軍部と公安機関のエリートが收拾するだろう、体制崩壊の可能性は少ない、金正恩氏への国民の支持は少なく指導力も不十分なので宣伝を精力的に続けている一などだ。

米国では、国防大学国家戦略研究所 (INNS) の10月14日の調査報告書「朝鮮の将来—北朝鮮の政権崩壊の米国外交への挑戦」の論調が紹介された。支配層内の勢力が金正日政権を倒すことになるが、生まれる新政権は弱体で中国の支援によって支えられる、しかし軍事介入を機に米中全面対決となる可能性がある、北朝鮮で政権が崩壊するような事態となればベトナム戦争以来アジア最大の試練になるだろう—という分析だ。

ロシアについては、世界経済・国際関係研究所 (IMEMO) が9月に政府に提出した報告書の分析を紹介。金正日総書記から金正恩氏への権力移譲プロセスが政権崩壊を加速させ、金正日氏が退陣すれば国家の方向性が失われ、官僚集団と軍・保守勢力間で権力争いが起き、韓国の統制下で臨時政府が樹立されることになり、2020年代に南北朝鮮統一が行われ、北朝鮮は存在しなくなる—というものである。

中国に関しては、11月15日の上海での朝鮮半島問題学術大会で出た見解を紹介。金正日—金正恩権力移譲過程には不確実性が包括されているが、政権崩壊の可能性は少なく、指導部は結束しており、下からのアクションが政権を脅かすまでには至っていない、先軍政治で権力維持を図りながら、ポスト金正日時代には張成沢国防委員会副委員長が中心になって体制の脅威にならない範囲で改革解放を進める—という見方だ。

これら各国の論調を踏まえ、姜理事長は北朝鮮が今後どうなるかについて、以下の5つを当面の結論として導き出した。

1. 金正恩が金正日と同じような主導権を握って統治するのは困難
2. 民衆蜂起の可能性は少ない

3. 金正日が身を引いても権力闘争は起きるが、大きな混乱は起きない
4. 張成沢が中心となって先軍政治を修正、党中心の国家体制に復帰していく
5. 着実に改革解放を進める。経済支援と引き換えに核の段階的破棄を進める

## ■進展へ向かう米朝協議

次に米国の北朝鮮に対する強硬政策転換の背景について述べた。6カ国協議再開の4大前提条件（ウラン濃縮活動の停止、核実験ミサイル発射実験の停止、国際原子力機関（IAEA）査察要員の復帰、核放棄を約束した2005年の6カ国協議共同声明の順守）のうち2項目を削り落とした。また、クリントン大統領時代に米朝関係を進めたシャーマン国務次官を起用し、ボスワース大使を更迭、デービスIAEA大使を起用などの人事異動を行なったと指摘。

米国が対北朝鮮政策を強硬路線から融和政策へ転換している背景についての姜理事長の説明は以下の通り。

- (1) 今までの強硬政策では成果がないまま北朝鮮の中国依存は深まっていく一方であるため、前のブッシュ政権第2期で圧力から融和へと政策を転換した後も、「戦略的忍耐」で北朝鮮関与を控えていたオバマ政権が、いたたまれなくなってきた
- (2) オバマ大統領再選のために米朝関係の画期的改善など外交的成果を挙げようとしている、米朝間ではトップ会談で解決可能で「アラブの春」にみられるような民族紛争や宗教対立で解決に時間がかかることはないためだ
- (3) これ以上の北朝鮮の核開発は米国の許容範囲を超えるが軍事攻撃も戦争回避策も見当たらないジレンマを抱えている（産経新聞掲載のリチャード・ハロラン・ニューヨーク・タイムズ東京支局長のコメントを引用）
- (4) 経済面でも米国の輸出を拡大する意味でも、米国は新たな世界戦略としてアジア太平洋政策重視へと外交姿勢を転換しようとして

いる。

例年1月に発表される米大統領の年頭教書でオバマ大統領が新たな北朝鮮政策を打ち出し、クリントン国務長官が特使として北朝鮮に派遣され、その後にオバマ大統領が訪朝する可能性もあるのではないかと、との大胆な予測にも言及した。

一方の当事者である北朝鮮は、経済危機打開の必要性から経済制裁解除を狙っており、中国やロシアからの経済支援取り付けにある程度は成功して米国牽制に成功したといえるが、米国との関係改善なくして韓国や日本との関係改善ができないことも十分に認識している。食糧危機などが続いて民衆の不満が高まると、体制崩壊へとつながっていき支配層が既得権を失う恐れもあることなどを合わせて対米接近を急いでいると分析。

## ■南北関係も融和局面へ

韓国の李明博政権は、金大中、盧武鉉両大統領が10年間続けてきた「太陽政策」を否定したが、融和政策へ再転換して南北朝鮮共存を図る動きが出ている。経済立て直しを期待された李大統領だったが、経済成長率の低迷、首都移転問題や大運河事業での国民の支持喪失、雇用問題の未解決と貧富の格差拡大、韓米自由貿易協定（FTA）での国論分裂と苦境に立っている。かといって野党にも期待できず、中間層は既成政党から離れている。

与党はソウル市長選で敗北して支持基盤はますます弱体化しており、朴槿恵氏の支持率低下、安哲秀氏が人気を集める現象、若者の反乱などが起きている。政府としては対北朝鮮強硬政策を続けてきたが事態改善の糸口をつかめないまま融和策へと転換。

韓国の北朝鮮との対話再開・融和政策への転換は李政権の対米追従政策を露呈することにもなったという。既に米中朝の3国間では一連の外交協議を通じて「南北—米朝—6カ国協議」という6カ国協議再開へ向けての道筋についての合意ができており、韓国は敷かれたその路線に従わざるを得なかった。7月と10月に2度にわたり米朝協議

が開かれた前に南北対話が動いたのもこのためだという。また、韓国民の間に政府の対北強硬政策に対する不安が増大し、南北対話を望む声が大勢を占める。南北関係の緊張により外国資本の逃避が加速するのを防ぐ必要もあるなどを指摘した。

北朝鮮の対南政策も柔軟になってきている。上述の3段階プロセスで米朝対話を実現するために6月と9月に南北対話を行った。

南北朝鮮首脳会談については、4月にカーター元米大統領の訪朝の際に意向が伝達され、5月に南北の秘密接触が行われたが、北朝鮮の国防委員会報道官がソウル側は首脳会談をカネで買おうとしたと暴露して当面のところでは立ち消えた。(会場から、東日本大震災後の東京での日中韓3国首脳会議で李韓国大統領が温家宝中国首相に南北で首脳会談準備を進めていると秘密交渉を漏らしたのに北朝鮮最高幹部が激怒して暴露したという説もあるとの指摘があった。日本メディアでは、温首相が金正日総書記の度々の訪中の際に改革開放を勧告していると漏らしたのに北朝鮮が反発したためとも伝えられている)。

北朝鮮は李明博政権を相手にせずとの強い姿勢を見せているが、実際は韓国からの食糧・肥料援助を望んでいるのが実情だという。米国のキング北朝鮮人権問題担当特使ら食糧支援評価チームの訪朝を受け入れており、11月にはニューヨークで北朝鮮外交官が米国際人道グループ「エルダーズ」と接触するなどの動きも出ている。

## ■日朝関係も動き出す気配

最後に日朝関係について、仲井議員が中国長春で北朝鮮幹部と接触、江藤征四郎氏が首相の親書を持って訪朝するも平沼氏ら反対派の動きでつぶされるなどの動きが出ていると指摘。米国と韓国が動いた以上、日本も動かざるを得ない、と姜理事長は指摘した。

日本政府は「拉致問題の解決なくして国交回復なし」と主張したことに縛られて何も動けず進展が得られない。6カ国協議でも他国は拉致問題を

取り上げて欲しくない。日朝間には正式な外交ルートもなく、米国にイニシアチブを取られて、将来の朝鮮半島問題で日本の影響力がなくなる恐れさえある。そのため日本はしっかりとした対北朝鮮政策を打ち出す必要がある、と強調した。北朝鮮にとっては、2002年の日朝平壤宣言で言及された経済協力資金(約100億ドルといわれている)の話は依然魅力的で、そのために日本人妻や拉致生存者の日本帰国を北朝鮮は準備中のようだという。北朝鮮からの初動はあり得そうにないので、日本から動く必要がある点を指摘した。

最後に、今後北朝鮮問題では、中国とロシアの影響が大きくなるだろう。特にロシアは朝鮮半島や東アジアで足場を築くために韓国とのパイプを強めている点を強調した。

## ■活発な質疑応答

質疑応答では、来年に6カ国協議が再開される可能性へ質問に、姜理事長は来年初めに米朝協議が進展すれば開かれる可能性があるという回答。今後も北朝鮮が砲撃事件のような軍事挑発行動をとるのかという問いには、「先軍政治」を強調する意味で行なったと思われるが、今後も繰り返される可能性は低いとみられ、米韓の軍事演習が北朝鮮を刺激した面もあるのではないかと述べた。

対米関係改善のために、北朝鮮側から米国に手を差し伸べる可能性はどうかとの質問に対しは、米国がうまく北朝鮮と手を組めなければ、北朝鮮はロシアと中国の影響下に入っていく、冷戦時の対立構造が再現される形になってしまうので、米国もそういった動きを避けるだろう。米国と北朝鮮の関係改善ができれば、北朝鮮の体制も安定するのではないかと述べた。

今年最後のセミナーだったので、参加者のうち有志が近く中華料理店で忘年会を開催、歓談した。

(報告：前田幹博・当研究所事務局長・研究員)

# 報告



朝鮮問題研究センター設立記念シンポジウム (2011年11月5日 朝鮮大学校)

## 躍動する朝鮮半島、その展望と課題

●編集部

11月5日に東京・小平市にある朝鮮大学校で、「朝鮮問題研究センター」が「躍動する朝鮮半島、その展望と課題」をテーマに国際シンポジウムを開いた。同校創立55周年を記念して同センターは新設され、翌日には周辺の市民を招き恒例の歌や踊りなど民族文化を紹介する学園祭も行われた。

シンポジウムの報告者は3人、朝鮮（韓国）語で主に行われた。米テンプル大で哲学博士号を得た中国の清華大訪問教授、昨年から北京で英文ウェブ・メディア「第4言論」責任主筆も務める鄭己烈チョンギョル氏の報告テーマは「今後の朝米関係が朝鮮半島と東北アジアの未来に与える影響」。一般的、常識的な国際関係とはほど遠い鋭い敵対関係が続いてきたのが特徴だと指摘。日本や韓国はもちろん、「Big Five」と呼ばれるグローバルな独占企業言論組織が、本末転倒の「加害者―被害者の対立構図」イメージを執拗に反復、拡大、再生産してきたと述べた。北朝鮮を「悪魔」と位置付けることが60年以上にわたり続いているが、悪意を示したのは（北）朝鮮ではなく米国だ、という。米欧帝国主義勢力に衰退の兆しが見えるが、まだ米国の「全方位的に孤立させようとする戦略」と「永久に戦争を続ける戦略」が残っているという。

### ■「地政学」から「地経学」へ

次に中国吉林省出身の金景一・北京大学朝鮮半島研究センター副主任が中朝関係について報告した。20世紀は「地政学の時代」だったと総括。近世史で、中国は朝鮮での伝統的地位を守ろうとして世界列強と衝突し、結局は日清戦争を境に中朝は「唇亡齒寒」関係となった。第2次大戦後は米ソ冷戦で中国国内の解放戦争と朝鮮戦争を経験、中朝は再び地政学的な運命共同体になった。中国は朝鮮を緩衝地帯と認識していた、という。

冷戦終結後、中国は米国・日本・韓国の「南方三角」と相次ぎ関係改善し構造が変化した。しかし（北）朝鮮と「南方三角」との対決は続いた。米国

が東北アジアへの力を維持するため冷戦構造の維持を図ったからで、米国の従来通りの地政学的な視角が、冷戦構造からの脱却を目指した（北）朝鮮と対立し、「核問題」を大きくした、というのが金景一氏の見方だ。この地政学的なアプローチを、中国が推進中の「地経学的」アプローチに切り替えることが根源的な問題解決に資するという。

核問題危機で2回の核実験に至るや、「南方三角」は相互に協調関係を強める一方、中国に北（朝鮮）との政治・経済関係を断ち、対朝制裁と圧力を加える動きに加わるよう要求。核問題解決の核心は「中国が（北）朝鮮との『同盟関係』を断つことだ」と迫った。中国国内でも緩衝地帯としての役割は終わったとして対朝鮮関係見直し論が出て、中国が対朝関係を変えるだろうと予測された。

しかし温家宝首相が09年10月に訪朝して予測は外れ、中朝の経済協力が大幅に強化された。

昨年は「天安艦」「延坪島」事件で対中非難が一層高まり、中国は（北）朝鮮を庇護して国際社会で責任ある大国としての役割を果たしていないとされた。中国が（北）朝鮮の首を締めれば（北）朝鮮は屈服するか崩壊するとの見方が支配的だった。だが、金正日総書記による連続訪中で北朝鮮の黄金坪・威化島、羅先の共同開発という史上初のプロジェクトが稼働し、中朝関係は一層強化した。

韓国側には、中国は依然として（北）朝鮮を緩衝地帯とみて冷戦期からの関係を変えられないとか、金正日総書記のロシア訪問に伴い「北方三角」対「南方三角」「新冷戦」ととらえる向きもあった。

中国のアプローチは冷戦時代には政治的要素が経済的要素より強く、支援方式も食糧や物品の必需品に集中する「輸血方式」、つまり地政学的だった。難局へ対応するだけで（北）朝鮮経済の持続的発展を進めるには制限がある。冷戦後にバーター貿易を国際慣行へと変えたが、全体姿勢は不変。

それが21世紀の初頭から目に見えて変化、「造血機能の強化」、そのための生産能力向上および先進

技術の取り入れと援助を意識的に結合させたり、(北)朝鮮の長期的発展に役立つ基礎建設プロジェクトを考慮に入れ始めたりするようになった。金景一氏は例として大安親善ガラス工場を挙げ、中国の援助で(北)朝鮮は市場原理を効率的に適用して住宅建設用のガラスを持続的に生産できるようになり「(北)朝鮮が市場型の企業管理を行う上で大きな影響を与えた」とされる。今年5月に全面使用が開始した新鴨緑江大橋も、建設工程は中国側が主要出資元で、(北)朝鮮経済発展の長期的な需要に応じる形で進められたとされる。

金景一氏によると、(北)朝鮮は来年を強盛大国としているだけに経済が今まで以上に全てを左右する。それだけに、地政学的枠組みを抜け出し経済を発展させる地経学的アプローチに転換すべきだという。この関連で経済管理政策の変更、自由貿易地区と経済特区の設立、大豊国際投資グループと国家開発銀行の設立などを前向きな例で挙げた。

金景一氏は、中朝が経済協力を強化していくことが、朝鮮半島における地経学的な要素を強く深くし、滞っている南北経済協力への道を開く先導的な役割を果たすだろう、と強調して報告を終えた。

## ■日朝関係を改善するための課題

最期の報告者はアジア経済研究所動向分析部長、国士舘大21世紀アジア学部長などを歴任した小牧輝夫・北東アジア研究交流ネットワーク幹事。誤解を招きかねない微妙な問題なので母語の日本語で話すと断り、朝鮮半島をめぐる国際関係に変化の兆しが見える中で日朝関係は「最悪状態」で泥沼から抜け出せないようにみえたと指摘。

日朝国交正常化交渉は既に20年を過ぎたが08年の瀋陽での政府実務者協議の後で中断したまま、09年夏に民主党政権になっても進まない。この間に国連による2回の制裁決議があり、日本は06年以降に独自制裁をさらに強め、(北)朝鮮船籍の船の入港禁止、送金や現金持ち出しの規制強化、輸出入禁止、往来規制で、日朝貿易は昨年輸出ともゼロにまで落ち込んだ。日朝間の経済関係は断絶、民間交流もほぼ中断状態だ。

改善の契機になるかもしれない動きはあるとして、国際的動向と南北関係を挙げた。米朝協議は7月と10月の2回で6カ国協議再開への明確な合意に

は至らなかったが継続可能性がある。米政府は経済苦境から柔軟な立場をとりにくいだが、ウラン濃縮による核開発の進展リスクもあり6カ国協議を志向せざるを得ない。6カ国協議の再開は日本政府にとり対朝関係改善のチャンスという。

また韓国の李明博政権も統一省幹部を入れ替え、政治社会の激動もソウル市長選挙で実証されたので、南北関係は軟化しそうだ。これも、日本政府が決意さえすれば動きやすい環境となる。

(北)朝鮮は中国との密接な関係構築に続きロシアとの関係も強化している。中口とも来年は指導部交代時期で、朝鮮半島安定化に関心を寄せるだろう。(北)朝鮮は強硬姿勢をとる基盤を固めたというより対米交渉を柔軟に進める環境を整えたと言えるのではないか。

野田首相の国会演説などを見ると、民主党政権で日朝関係改善は難しそうだが、可能性は全くないわけではない。制裁を積み重ねても拉致問題で進展はなく、日本は(北)朝鮮との対話の窓を自ら閉ざしていることで核問題など重要問題に関して国際的にしかるべき役割を果たせなくなっている状態に対して政治家の間に危機感が生まれ、09年に超党派「日朝国交正常化推進議員連盟」ができた。政府交渉を求める声が拉致「家族会」の中からも出ている。対話再開のための環境づくりとして、サッカーなどスポーツ交流や朝鮮学校に対する就学支援適用などが望ましい。拉致問題を交渉の入口でなく出口にする必要があり、その際は「拉致問題の解決」とは何を意味するのか明確にし、物理的に可能なこと、不可能なことがあるのを政府も国民も理解しなければならぬという。

「強盛国家の大門を開く」来年は(北)朝鮮にとり大事な年で、金正日総書記としても経済再建・発展のための安定した国際環境をつくり、後継体制を固めたいだろう。それが直ちに(北)朝鮮の妥協を意味はしないが、日本側が誠意を示せば話し合進展の可能性は残されており、(北)朝鮮側にも対応を求めたい。来年は話し合いの基礎となる日朝平壤宣言の10周年でもあり、人道的な次元で日本側が人的往来の規制を緩和していくべくではないか、と述べた。

(編集部、報告者は「朝鮮」と述べましたが、日本での通例と照らし(北)を付け加えています)



# 虎穴に入らずんば、虎児を得ず

## —日本人研究者の中国観を論ずる—

李鋼哲・Ri Kohtetsu  
本誌編集委員、北陸大学教授

### ☆日本を知り尽くした多くの中国知識人

日本人の中国に関する論評を読むたびに、心痛く感ずるところが一つ、いやそれ以上ある。つまりほとんどは、中国現実の表面（外から）しか論究できていない傍論である。もちろん、傍論も必要であることは言うまでもない。しかし、本質をつかめない傍論だけでは、研究対象に対する判断を誤りかねない。したがって、それに基づいた政策判断は国家の戦略や政策を誤りかねない。最近読んだ岡崎研究所や山下英次氏の論評を読むと、「対岸の火事を観る」かのような論評にしか思われない。

『孫子兵法』には「己を知って彼を知れば百回戦っても敗けない」（知自知彼，百戦不殆）という諺があることは、日本人はみんな知っているはずだ。日清戦争で小さな日本が大清帝国に勝ったのは、明治維新以来（もしかすると遣隋使、遣唐使以来とも言えるかも）の日本は中国をよく研究し知り尽くしていたからかもしれない。逆に、かつての中国は、帝国の尊大さのゆえに日本のことに対してほとんど無知であったから、相手の戦法を知るすべもなく、散々負けたのである。

今の日中両国の相手に関する認知度はどちらかといえば、日清戦争の時代とは逆転しているような気がする。「改革開放」以来、中国の若手知識人は日本に大量に留学してきて、現在は日本の教育や研究分野の隅々まで中国の研究者がいる。筆者もかつて日本の国策研究機関で政策研究に携わったことがある。また、多くの研究者が日本を「知り尽くして」中国に帰り、中国の頭脳集団になっている。彼らはいつも冷静に、的確に日本の一挙手一投足を分析し政府の政策指針に影響を与えている。虎の穴に入った、または入ったことの

ある中国の頭脳集団は相当数いる。

### ☆中国を知ったかぶりする日本人研究者

これに比べて、日本はどうなのか？日中交流が自由になってからの30年余りの期間に、日本の中国研究者はどれくらいに相手の「虎の穴」に入って、相手の人々と皮膚を擦り合せながら（裸の仲間になって）中国の研究をしたのだろうか。中国人の気持ちをどれくらい理解しているのか。はなはだ疑問である。

本年2月に、ある雑誌に筆者は「『戦略なき国家』『頭脳なき国家』の悲劇」という論評を書いたことがある。戦略がないのは戦略を研究する能力のある頭脳集団が欠如しているからである。中国には日本研究をする一流の頭脳が数百名、数千名いる。日本では中国研究をする専門家は数えるほど少ない。それもほとんどは、本とかテレビとか、欧米の論評を読んで自分は中国研究者だと錯覚している人が少なくない。韓国に度々行くと「中国研究」するという人々と国際会議やプライベートで遭遇するが、多くの人は米国留学帰りで、中国に対してほとんど無知であることをつくづく感じてしまう。日本は韓国よりはましであるが、それでも素人の論評が多過ぎる。

中国に関して「共産党独裁」や「民主化」に対する見解、「民族問題」や「ネット世論」に対する見解などを見ると、どれ一つとっても本質からほど遠い傍論にすぎない。「中国共産党」やその統治能力に関してどれくらい知っているのか。よく見てみると無知に等しい。「旧ソ連やリビアなど独裁国家が崩壊したから中国の独裁もいずれ崩壊するかもしれない」という論理は、全く実態を知らない議論である。

## ☆国内外情勢を熟知する中国共産党幹部

筆者も「共産党独裁」はいずれ崩壊するか、変わるだろうと推測している。しかし中国の頭脳陣は、ソ連崩壊の歴史や原因を分析しつくしている。「天安門事件」以来、または旧ソ連崩壊以来の中国の対外・対内政策は、旧ソ連の教訓を深く認識してのものであることを、日本の「中国研究者」はどれくらい知っているだろうか。中国のトップ・リーダーたちは、もしかしたら世界で最も「民主化」していると言えるかもしれない。9人の政治局常務委員は、序列はあっても絶対的なトップはいないのである。重大な国策は9人が認

識をそろえた時に生まれるのである。

9人の常務委員を含めた数十名の政治局委員が、毎月国内外の有数の各分野専門家を招いて国内外情勢に関する勉強会をしていることは、どれくらい日本で知らされているのか。私の同窓生も中国人民大学の著名な憲法学者であるが、1990年代に李鵬首相に招かれて講師を務めたことがあると聞いている。

日本の有数の企業家は、中国政府のいろいろな分野の顧問役として活躍しているが、日本の中国研究者は中国でほとんど影響力がない、と筆者は観ている。中国研究者に「虎の児を捕るために虎の穴に入る」ことをお勧めしたい。

————— ☆ ————— ☆ ————— ☆ —————



## 秋のソウル

小野田美紗子・Onoda Misako  
ジャパン インターカルチュラル コンサルティング

5年ぶりに韓国を訪問した。2011年11月、美しい秋の1週間である。仁川<sup>インチョン</sup>空港からバスに乗って、まだコートはいらない乾いた空気<sup>インチョン</sup>のソウルに入る。

私は企業に「異文化コミュニケーション」の仕事を提供している。海外とビジネスをする日本企業に研修を提供したり、コンサルタントとして助言したりする。海外は韓国以外にも中国、中近東、ヨーロッパ、北米、南米と、つまりは日本の企業が進出する多くの国が対象となる。仕事柄、海外にひんぱんに出かけるが、韓国からはしばらく遠ざかっていた。「韓国はかなり知っている」という自負があったのだ。しかし、韓国オタクが最近の若い世代のあちこちに出現。彼ら、彼女らは最新の化粧品や韓流スターにやたらに詳しい。「韓国、素敵ですね！ かたつむりのパック使ってますか？」などと聞かれる。先日も外資系大手企業のベテラン担当者から、どこか観光地を推薦してくれますか、と聞かれた。身近な所<sup>インサドン</sup>で仁寺洞など説

明し、最後に「韓国訪問は初めてですか？」と聞いたら、昨年から数えても7回行った。先日は何とかの俳優のロケ地も訪問した、との返事。

私は正直あわてた。一応、韓国ビジネス文化の専門家を売りにしているのに、若手俳優の顔と名前が一致しないし、雑誌で頻繁に紹介されている<sup>ブクチョン</sup>北村韓屋村も知らない。江南<sup>カンナム</sup>の高級エステショップも知らないし、ましてかたつむりパックなどゲ



スターアベニューでポーズをとる観光客

テモノだと思っていた。「それで果たして専門家と言えるのか」と恐れおののいてしまったのだ。しかも、韓流スターも化粧品も、今やサムソン、LGと並ぶ韓国経済成功のシンボルである。それを知らずにコンサルタントが務まるのか？ 変化した韓国を肌で知らなくては、と思いついてのソウルである。

空港からのリムジンバスを降り、清溪川<sup>チョングチョン</sup>にかかる橋を渡る。清溪川の河岸の遊歩道には提灯祭りで大勢の人が集まっている。そぞろ歩く人でぎっしり。夕闇に灯る光が幻想的で、しばしうっとり。ホテルにチェックインしたらもう夕食時間だ。まずはビビン<sup>ネンミョン</sup>冷麺を食べに行く。日本では不味くて高い冷麺。冷麺だけは韓国本場で食べなくてはいけない。向かう先はちょっと名の知られた店だが、私は初めての訪問である。弘大入口<sup>ホンデイック</sup>の大好きだった冷麺の店の味がガクンと落ちたので、新しい店の開拓に迫られてのことである。懐かしい<sup>ミョンドン</sup>明洞の奥、その付近だけは昔のまま。変わっていないのが妙にうれしい。勘を頼りに行くと、たびたび訪問したしゃぶしゃぶ店の前である。気づかなかったなあ、ここが有名店とは。ビビン冷麺は昔ながらの基本に忠実な味であったが、美味しさよりも安さに感激！ 安い！ の感動で一気に平らげてしまった。それから周囲を見回すとマッコリとビールを飲むカップルが一组。女性が泣いている。大きな涙を流している。フーム、韓流である。

翌日、朝一で三清閣<sup>サムチョンガク</sup>を訪問した。以前は高級<sup>キーセン</sup>キセソ生と生バンドを呼んで、歌って遊んだ一部特権階級男子の隠れ場だった。私もバンドと共に歌ったことがある。妓生も飛び切りの美人だった。今

は方向転換をして盛んに若い女性向けに「文化施設」として宣伝している。韓国観光公社のガイドブックには「韓国の伝統家屋ならではの情緒あふれる別棟は、工芸、茶道、伝統音楽など文化体験の場となっている」とあり、心惹かれる。しかし、朝一番のシャトルバスで訪問したせいか、ガイドブックのような体験工房は見当たらない。韓国人は午前中はなるべく働かないで休み、前夜の疲れをとって来る夜の鋭気を養っている、ということ忘れていた。

山の上の韓国の朝。すっと切れ味のいい空気である。仁川空港到着以来、下界のスモッグを吸い続けているためか、透明な空気の美味しいこと。そして紅葉のみごとなこと。建物は古びて往年の華やかさを失っても、何とか生き延びている三清閣。観光地化して現金を手にいれなくてはこれらの建物の維持は困難だろう。「お疲れさん」と三清閣に声をかけ、北村韓屋村に向かった。この地域もこの数年、急に観光地としてスポットライトを浴びている。韓国観光公社のガイドブックには「昔ながらの路地がそのまま残されており、600年の歴史を誇る都市の風景」とある。今回の旅行では目玉となる韓流ムードいっぱいの地域だ。路地をぶらつき「昔のものを大切にする新しい韓国」を感じた。以前は江南のアパート群が超高値で取引され、この辺りの韓屋など見捨てられたも同然だった。もともと韓国人は「新しい物好き」。古い文化などさっさと見限り、投資対象のアパートに走ったのだ。ここに来て、自国文化がお金になるとわかり、結果的に美しさにも気付いたのか、とそれなりに納得。門や塀を朝鮮文化式に修理する



提灯祭りの清溪川



三清閣の紅葉

と補助金が出るという。そのためか、600年の、とうたうには、どの塀も門も真新しい。機を見るに敏、なのも韓国である。土台がコンクリートの「伝統家屋」が多い。本物の古い家はフォークレーンでつぶしている。昔からこの地を愛して暮らしていたイギリス人が、伝統遺産を壊さないで欲しい、と行政訴訟に持ち込んだ、との話も聞いた。2011年春に、久方ぶりでこの地域の韓屋が売り出され、ブームを背景に超高額で買い手がついたらしい。

狭い坂道の高級そうな門から、犬を連れた若い男性が出てきた。私はイケメンより犬に目がいく。犬はラブラドルレトリバーである。韓国で初めて出会ったラブラドルだ。犬を散歩させる人を見て「韓国は変わった」と実感。11時が過ぎ中国人、日本人の観光客が次々と押し寄せ始めた。日本の女性が「わあー、かわいいっ！」と塀を指さしうれしがっている。朝鮮文化を見て「かわいいっ！」と叫ばれたらたまらない。そろそろ引き際。ソウルに来れば必ず寄った清進洞チョンジンドンのスンドゥブ店に向かう。

すでに清進洞は壊されて通りも店も無いと聞いていたのだが、この目で確かめるまでは信じたくなかった。しかし、やはり跡形もなく、ただ、巨大な工事現場があるだけである。スンドゥブも、韓国でなくては満足できない料理の一つである。だいたい日本のスンドゥブは豆腐チゲである。それに全然辛い。辛いスンドゥブなんて、偽物である。看板に「スンドゥブ店」とだけ書かれた、明瞭簡潔な清進洞のあの店はどこに行ったか。あそこで働いていた人なつこいアジユモニたちはどこに行ったか。故郷に帰って、濃厚な本物の味を家族のためだけに作っているのだろうか？それとも近所に移動しているのか？と見回すが、工事現場を隠すトタンの塀がむなしく続くばかりである。この変わり身の早さこそが、現代韓国ビジネスの強みだから、まあ、昔の味は忘れるしかない。

気を取り直して中央日報裏に昔からあるスンドゥブ店に直行した。丁度昼の一時ごろでサラリーマンで大賑わいだ。見回すと多くの客がスンドゥブと白米の丼を食べている。美味しかったけど、辛くなかった。韓国人は辛い料理を食べなく



おしゃれマッコリ

なったのだなあ、としみじみ思う。キムチもおしなべて辛い。ある店で白菜のつけものを出されたので、「キムチをくれ」と注文したら、「それもキムチだ」と言われた。文化的には確かに白キムチだが「赤いのが良いの。ここは韓国でしょう」とかえてもらった。また、数日後に若者が行く店でマッコリを注文したら、ワイングラスに注いでくれた。若者はグローバル化を目指して世界に顔を向け、辛い韓国を捨てるのか？残念である。韓屋を大切に心が芽生えたなら、辛い料理も大切にしてほしい。店を出たところにある小さい公園には、サラリーマンがつめかけ、全員が空に向かってタバコをふかしている。手にはスターバックスのコーヒー。グローバル化を厳しく迫られている韓国のサラリーマンは、昼はコーヒーとたばこでストレス解消している。そのせいか、テポチプ(一杯飲み屋)の多くがコーヒーショップに店替えしている。

午後3時。一気に歩いているせいか、かなり疲れてきた。ソウル市庁前の地下道を下りたり上ったりするのを考えるだけで足の疲れが増す。しかし、身体が不自由な人の苦勞を思わずにはいられなかった横断歩道のない市庁前広場に、信号が一つ増えていた。ソウルは川もきれいに修復したが、わずかとはいえ、横断歩道も作ったのである。地下道への階段にも、体が不自由な人のための、車椅子で動ける器械が導入されている。急速に増殖中の若者韓国オタクには当たり前に見える風景も、昔からの韓国オタクには変化の象徴である。韓国は大国となり、日本を追い抜いたなあ、と実感した風景であった。



## 編集後記

### 民主主義は政治体制の最終形態？

フランス・フクヤマは1992年に著書『歴史の終わり』で、歴史とはイデオロギーをめぐる争いだから、その闘争が終わる時に歴史は終わる、ソビエト連邦の崩壊に対する自由主義陣営の勝利として、民主主義と自由経済が最終的に勝利し、それ以外の社会制度の発展が終結する、と述べた。

現在の米国の情勢を見てみるとどうだろう。9・11テロの報復戦争として自ら始めたイラク・アフガン戦争で疲弊し、リーマン・ショック後も立ち直れず、このところ失業率も一段と高まって、若者はウォール・ストリート脇で1%の富裕層を批判するデモを繰り広げる。

対する共産党一党独裁の中国は、金融危機の後にも多額投資で二桁近くの経済成長を保ち、昨年GDPで日本を抜いて世界第2位の経済大国に。社会主義と市場経済の融合に成功したとみてよいだろう。

一方でユーロ圏は、ギリシャの信用不安からPIIGS(ポルトガル・イタリア・アイルランド・ギリシャ・スペイン)と呼ばれる国々が自力で金融・財政改善ができない可能性が高まり、通貨ユーロは急落している。

翻って日本は、民営化を促進して小さな政府を目指し、世界的経済成長の波に乗って経済成長した時期もあった。しかし甘い公約による政権交代以来、公約とは裏腹に保護主義的色合いを強め、一段と大きな政府を目指し、公約と実際の政策が異なっても問題ないと強弁する。一方野党は、国民よりも自党に有利な政策を支持する。米国でも欧州でも日本でも、政治家の行動や資質を疑問視する声が高まっている。一般の有権者には、投票の一瞬にしか政治参加の機会はない。このような状況でも、現在の民主主義が最終的に理想的な形態といえるのであろうか。

遅すぎたといわれる前に、望ましい民主主義の形を考え新たな機会かもしれない。(前)

### 身近になるグローバル化

師走の街にイルミネーションが輝く。東日本大震災による東電の福島原発事故のあおりで夏の節電に次ぎ冬も「電力使用削減」が叫ばれている。でもLED照明の普及で使用電力は少なくて済むそうだ。「冗談じゃあないっすよね。クリスマスツリーを出さない店がある。お上に言われようと何だろうと、こんな不景気だからこそ、街をパアッとしくちゃ」と寿司屋店主は息巻いている。

カウンターのオペラ好きの客が、欧州有名歌手の日本公演キャンセルが続くとぼやく。大量キャンセルで切符の払い戻しを受けてきたばかりだという。「それはそうだよな。チェルノブイリの放射能で怖さを知っている」とうなずく脇の人。

主人ではないが、景気も思わぬ場所から足をすくわれた。「ギリシャが派手に金をばらまいたツケが、どうしてワシらに回ってくるんですか？」

今まで海外と取引のある大企業だけの問題かと他人事扱いだった「グローバル化」が、どんどん身近になってきている。富裕層1%と、その他99%の格差が広がる一方という思いは、ウォールストリートだけでなく世界各地で共感を呼ぶ。

でも日本らしい緻密な電力の使用・統制計画が大停電を経験した韓国で取り入れられつつある。「もったいない」精神は異国趣味を超えて資源節約の世界的標語になる可能性がある。内に閉じこもって「独裁」を待望するのではなく、プラスの意味のグローバル化へと視点を広げたい。

(作)

### \*会員の申し込み\*

#### ◎会員(年間)

《個人会員》 1口5千円  
《法人・団体会員》 1口5万円

#### ◎特典

会員は定期刊行物「東アジアレビュー」の配布を受け、その他の刊行物について特別割引、当研究所が開催するシンポジウム・セミナー参加、また委託調査事業において優遇を受けることができます。

◎会員の申し込みは、所定の申込用紙をFAXにてお送りください。

## 東アジアレビュー

THE EAST ASIAN REVIEW

2012年12月号

第21巻・第12号・通巻180号

2011年12月1日発行

発行人 姜 英之

編集人 平川 均

編集主幹 根津 清

編集委員

小野田明広(編集長)・長瀬誠・田村秀男・西和久・朝倉堅五・前田幹博・  
李鋼哲・李燦雨・金丸知好・和仁廉夫・劉鋒・斎藤諭

編集スタッフ

橋本みゆき・堤一直・金暎淑

発行所 東アジア総合研究所

発売 株式会社AIB

〒105-0004 東京都港区新橋5-8-5 高島ビル3F

TEL: 03-6809-2125 FAX: 03-6809-2126

http://www.eari.or.jp/

印刷・製本 株式会社 東邦